

21世紀の日本のかたち（33）

－ 日韓交流 －



戸沼幸市
〈(財)日本開発構想研究所 理事長〉

1. 韓国広場

東京新宿の一角に、ソウルの盛り場、明洞と錯覚させるほどの韓国のまち、コリアンタウンがあります。



北新宿とコリアンタウンの位置

新宿区には現在、110以上の国から外国人3万6千人余が居住しています。新宿の居住人口32万人（平成22年9月1日現在）の1割を超えています。

外国人の新宿における分布は全区に及んでいますが、特に大久保から百人町、北新宿に集住、密住しています。

この中で歌舞伎町を挟んで、職安通りから北

側の大久保は、韓国系の人々の住むコリアンタウン化しています。隣接する百人町は中国、台湾系のチャイナタウンです。

韓国（朝鮮）系の人々は戦前、戦後を通じてこの地域に居住しておりますが、1990年代、特にその後半に急速に外国人の流入が起こり、多国籍な混住の様相を増し、まとまったエスニックタウンとして自立した地域になりました。

大久保エスニックタウン、コリアンタウンは、まず新宿の国際盛り場、歌舞伎町勤めの従業員のリゾートタウンとして生まれました。

日本の高度経済成長でGDP世界2位となったバブル期、日本マネーに引き寄せられて、世界中、特にアジアから大量の労働者がやってきました。東京の盛り場新宿歌舞伎町は、日本人女性を追い出す勢いで、ホステス、飲食店従業員など、韓国、中国、台湾、ベトナム、フィリピン他、大勢のアジアの女性の働く場となりました。

観光客として、あるいは短期ビザを利用して来日し、バブル期、ポストバブル期を通してこの地域の労働市場を席卷していったのです。家賃の安い木賃アパートが多い場末的雰囲気のあるこの地は、格好のベッドタウンとなってきました。一つの部屋に幾人も住んで、夜の盛り場勤めをすることになりました。

大久保がエスニックタウンとして成熟していく経過が興味深いのです。「住」の次は「食」と「衣・雑貨」です。街に各国料理の飲食店、食材屋、美容院、一通りの生活廻りの店が生まれます。需要と供給の経済原則が働き、住む人々のための街となるわけです。借りた店舗で商売する人から、自ら所有する土地、建物で商売する人々も生まれました。このように大久保界限は多国籍の人々の住む生活圏としての構えが1990年代後半から2000年にかけて整っていきました。住民も大勢になり、国際結婚をし、子供が生まれると、地域の保育園や小学校もインターナショナルスクールとなります。

大久保通りに直交して短冊形の敷地は現在もそのままに残っており、短冊街区の中に、更に小さな敷地、軒を並べたこの小空間に小さな元手で始められるスモールビジネスで賑やかになり、コンバージョンを繰り返し、まとまったエスニックタウン、コリアンタウンとして新宿の中に存在感を示し、混住の生活と生活空間を再生産し続けています。

日本・東京の一角に生まれた独特な景観を持つエスニックタウン、コリアンタウンは、今や日本人の観光名所にもなっています。

2002年のサッカーワールドカップ日本・韓国の同時開催や、日本人女性を魅了した2004年「冬ソナ」の大ヒットによる韓流ブームも、この地域のコリアンタウン化に勢いをつけたようです。

グローバル化の中で、国を越えた移動は21世紀ますます強まると思われますが、他国への移住の際にまず当面するのは言葉の問題です。大久保界限には日本語学校も少なくありません。また日本人がボランティア的に日本語を教えたりしています。

そして、困った時に頼れる人、ところ、精神

的拠り所が必要です。この点で、大久保には宗教施設があり、大きな役割を果たしています。大久保通りの目抜きにある韓国系キリスト教会、東京中央教会（淀橋教会）は、今や地区を越えて多くの信者を集めています。異国からくる人々の広場です。

コリアンタウンには店名「韓国広場」という食材を扱う大きな店があります。開業15年になるこの店は、韓国の人々とともに日本人も大勢利用している様子です。店の主人の金根熙（キム・クンヒ）さんは、日本人に韓国の料理を食べてもらい、韓国の食文化を通して韓国を知ってもらいたい、と新宿学講座（注1）で話してくれました。たしかに異文化交流には胃袋をつかむのが一番です。



職安通り付近（コリアンタウン）

金さんはまた、日本人は、韓国やアジアの人々を労働力として受け入れたが、やってきたのは「生」の人間だと言っておりました。グローバル時代のまちとして、日本の中に多民族が共生

するためのあたりまえのまちづくりがなされるべきであり、そのためのミドルマン、つなぎ役の必要性を説いておりました。

すでに1割を超す外国人居住者のいる自治体新宿区としても歌舞伎町に「しんじゅく多文化共生プラザ」を設けており、日本語の学習、文化の紹介、アルバイトの世話、日本での就職などの相談コーナーは、利用する人々も多くなっています。

具体的生活を通してアジア的多文化共生のまちが日本に出現してゆくのでしょうか。そして最も近い隣国、韓国との交流も深まってゆく様子です。

2. 留学生

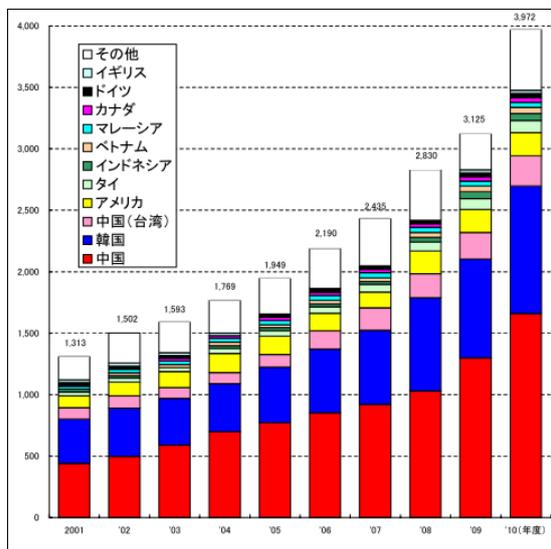
新宿、戸塚に在る早稲田大学は2007年10月に創立125周年を迎えましたが、戦前、戦後を通じて多くの留学生を受け入れてきました。

日清戦争（1894～95）後、明治32（1899）年には、清国から初の留学生が早稲田大学に入学しました。明治38（1905）年には、定員600人の清国留学生部を設置し、本格的に清国からの留学生を受け入れました。日清戦争の終結、下関条約による遼東半島、台湾割譲、そして明治43（1910）年の韓国併合の後、大日本帝国政府は台湾や朝鮮に日本の学制も持ち込み、小学校から大学までを設置しましたが、合わせて日本国籍を持つ人としてこれらの国々からの大勢の留学生を受け入れました。この時期の留学生達は、日本において世界情勢を見聞し、やがてそれぞれの国の独立運動に大きな役割を果たすことになりました。戦後は戦前からのつながりもあり、韓国、台湾、そして中国から再び多くの留学生がやってくるようになりました。

現在ではほぼアジア全域から、戦後日本の復

興ぶりもあって、早稲田大学に外国人留学生が急増しました。現在では、欧米からの留学生も多くなり、全世界に及んでいます。これはまた、日本からの海外留学と表裏をなしますが、日本の場合、欧米、特にアメリカが多いのです。アメリカが多いのは第二次世界大戦の直接の相手であったからでしょう。

早稲田大学に限らず、海外の大学と交流し、留学生を受け入れている大学は多いのですが、早稲田大学の場合では、現在、留学生数は約4,000人（2010）、大学としての交流協定校は約90か国と地域、約650校に及んでいます。



早稲田大学 外国人（留）学生の推移
(資料：早稲田大学留学生センター)

早稲田大学はグローバル（グローバル＋ローカル）ユニバーシティを標榜し、アジア、太平洋の存在感のある拠点校を目指しています。日本の大学で30万人の留学生を受け入れる国の方針に合わせて、早稲田大学は2015年までに8,000人の留学生の受け入れを目指しています。日本と朝鮮半島、台湾や大陸は地理的に近いこともあり、この地域から日本への留学希望が多いのです。この中で早稲田大学への入学希望が多いのは、戦前からの早稲田大学とのつながりで知

名度が高いことにも因りましよう。校風にもアジアの雑居性があり、この点は新宿にある大学ゆえかもしれません。

早稲田大学に来る留学生の関心は多様ですが、欧米人の場合は、日本文化に惹かれる場合が多いのですが、アジアの場合は、日本の戦後復興、経済大国、先進国に展開した方法論に興味を持っているように思われます。同時に東アジアという21世紀の地理的枠組みに21世紀の共通の生活圏を意識しつつあるものと考えられます。

私自身の経験をいえば、1972に都市計画系研究室を開設して以来、多くの留学生を受け入れてきました。早稲田大学に在職した2004年まで、韓国からの留学生が一番多く、台湾、中国、インドネシア、マレーシア、イスラエル、ロシア、ドイツ、オーストラリア、ペルーの10か国から、主に大学院に入ってくる留学生でした。このうち10人が博士号を得て、それぞれの故国に帰って教師になっている人が多いのですが、中には、日本の会社に入って働いている人もおります。皆、現在大活躍しているのが頼もしいかぎりです。日本とそれぞれの国の架け橋になり、今もって私とも、共に学んだ日本の同級生とも交流が続いています。共に学んだ日本の同級生にとってもメリットが大きいのです。

日本人同士の場合は考え方が島国的に小さくなりがちですが、外国人が入ると、立場の違いからの見方があり、グローバルなスケールに広がりがあります。

留学生には、できるだけ日本のまちや生活を見て貰うように、日本人には留学生の国を訪ね、その土地、現場を踏むというのを、私は都市計画の研究手法とし、これにそって学生とともに留学生の国々を訪問しました。

大学での勉強の後、地元新宿の歌舞伎町では

よく学生達と飲んで、地元の人々と交歓・交流しました。留学生達も大久保付近に下宿し、留学生は、博士論文の仕上げの前に子供が生まれたり、地元コミュニティの仲間入りをするケースもありました。日本生まれの子供を連れて帰国した学生が幾人もいます。他国の文化、その土地の人々の人情に触れることで、目を開かれたことが少なくないのです。

多文化共生、異文化体験に何か大きな意味を感じます。

3. 韓国併合100年「痛切な反省」

そして明日の100年へ

今年は日韓併合100年の節目の年になります。菅直人総理大臣は、8月10日「痛切な反省」の談話を発表しました。

「本年は、日韓関係にとって大きな節目の年です。ちょうど百年前の八月、日韓併合条約が締結され、以後三十六年に及ぶ植民地支配が始まりました。三・一独立運動などの激しい抵抗にも示されたとおりに、政治的・軍事的背景の下、当時の韓国の人々は、その意に反して行われた植民地支配によって、国と文化を奪われ、民族の誇りを深く傷付けられました。

私は、歴史に対して誠実に向き合いたいと思います。歴史の事実を直視する勇気とそれを受け止める謙虚さを持ち、自らの過ちを省みることに率直でありたいと思います。痛みを与えた側は忘れやすく、与えられた側はそれを容易に忘れることは出来ないものです。この植民地支配がもたらした多大の損害と苦痛に対し、ここに改めて痛切な反省と心からのお詫びの気持ちを表明いたします。」

三・一独立運動とは、1919年3月1日を期し、朝鮮各地で始められた朝鮮近代史上最大の反日独立運動であり、アジアにおける民族独立運動の原点ともいわれているものです。

日本国はこの時代、朝鮮半島の人々に対し筆舌に尽し難い大きな苦痛を与えました。創氏改名などは民族固有の人格の全否定です。

「日本と韓国は、二千年来の活発な文化の交流や人の往来を通じ、世界に誇るすばらしい文化と伝統を深く共有しています。さらに、今日の両国の交流は極めて重層的かつ広範多岐にわたり、両国の国民が互いに抱く親近感と友情はかつてないほど強くなっております。また、両国の経済関係や人的交流の規模は国交正常化以来飛躍的に拡大し、互いに切磋琢磨しながら、その結び付きは極めて強固なものとなっています。

日韓両国は、今この21世紀において、民主主義や自由、市場経済といった価値を共有する最も重要で緊密な隣国同士となっています。それは、二国間関係にとどまらず、将来の東アジア共同体の構築をも念頭に置いたこの地域の平和と安定、世界経済の成長と発展、そして、核軍縮や気候変動、貧困や平和構築といった地球規模の課題まで、幅広く地域と世界の平和と繁栄のために協力してリーダーシップを発揮するパートナーの関係です。

私は、この大きな歴史の節目に、日韓両国の絆がより深く、より固いものとなることを強く希求するとともに、両国間の未来をひらくために不断の努力を惜しまない決意を表明いたします。」

この日本の菅談話に韓国の李明博大統領は、

韓国が日本統治からの解放を祝う記念式典「光復節（8月15日）」に、政府報道官を通して次の談話を発表しました。

「過去の不幸な歴史に対する正しい認識と洞察を基礎に韓日関係が未来に向けた関係にさらに発展することを希望する。」

この談話には韓日交流に対する明日の100年への期待がにじんでいます。

今や日韓は最も近い隣国であり、21世紀のアジアにおける運命共同体です。この時、李大統領が南北問題について「平和統一を実現」に言及したことが注目されます。

将来の東アジア共同体の構築については、すでに様々なレベル、様々な場面で出現しつつありますが、改めて国家間でも民間でも更なる進展をめざしたいものです。その際、日韓が日中（台）とともに、一つの軸となるにちががありません。

私ども日本開発構想研究所でも、東アジア諸国の都市・地域、国土計画レベルでの問題と方策について、各国の取り組みについて勉強を始めているところです。

注1：「新宿学」21世紀の日本のかたち（29）

注2：文中に掲載の写真は戸沼撮影

(2010.09.15)

韓国について

▶ 国勢概要

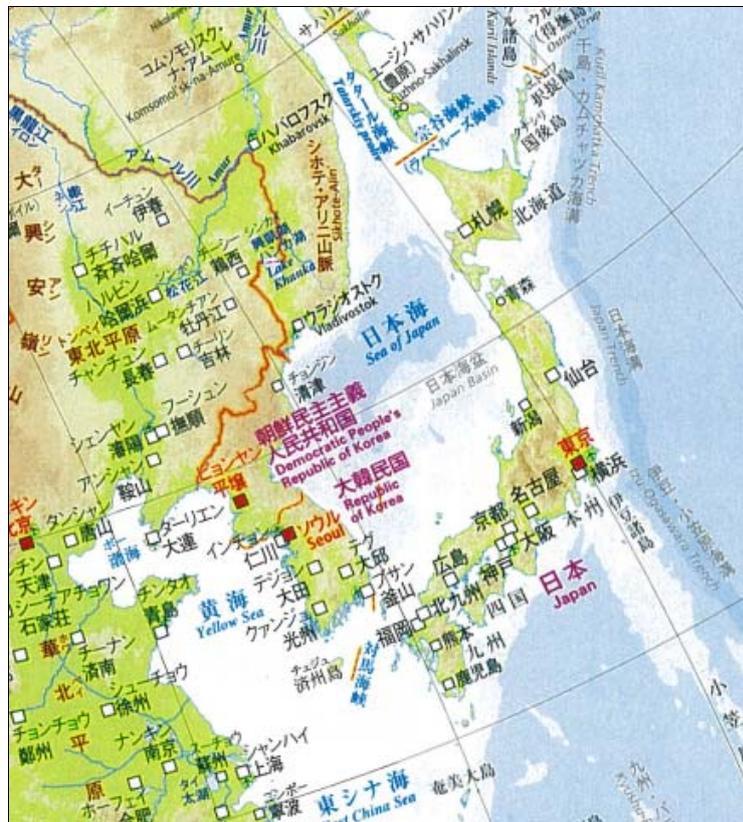
国名	大韓民国 Republic of Korea
国土面積	約10万33km ² (朝鮮半島全体の45%、日本の約4分の1)
人口	約4,887万人(20010年現在)
人口密度	485人/km ² (2005年)
都市人口比率	82.7%(2009年)
GDP(名目)	9,291億ドル(2008年)
一人当たり 名目GNI	17,175米ドル(2009年)
産業別 就業人口比率	第一次産業 7.4% 第二次産業 25.6% 第三次産業 67.1%(2007年)
経済成長率	0.2%(2009年)

▶ 地方ブロック図



資料:(財)日本開発構想研究所作成

国土交通省ホームページ「各国の国土政策の概要」より



日韓の位置